

マレーシアのワヤン・クリ

戸加里 康子

2006年3月11日、国立民族学博物館において伝統芸能の映像記録に関する研究会（共同研究「伝統芸能の映像記録の可能性と課題」）が開かれた。国立民族学博物館は、これまでもカンボジアの影絵芝居の映像記録のプロジェクトなどを行なっているが、マレーシア、特にクランタンの芸能が次のプロジェクト候補にあがっているとのことで、マレーシア科学大学（USM）の Tan Sooi Beng 教授、マレーシア（特にクランタン）の芸能の記録及び保護をめざす NGO、Pusaka の Eddin Khoo 氏が招かれ、クランタンの芸能、特にワヤン・クリ（影絵芝居）の状況と映像記録の実践の状況について研究発表と意見交換が行なわれた。

マレーシアのワヤン・クリというと名前は聞いたことがあっても、実際に観た方は少ないのではないかと思う。そこで今回、簡単にその概要とワヤン・クリを巡る状況などを紹介してみたい。

マレーシアのワヤン・クリ

マレーシアには4種類のワヤン・クリ(wayang kulit)があると言われている。ジョーホールのワヤン・クリ・プルワ (purwa)、クダのワヤン・クリ・ゲデッ (gedek)、クランタンのワヤン・クリ・ムラユ (melayu) とワヤン・クリ・シラム (siam) である。

ワヤン・クリ・プルワとワヤン・クリ・ムラユは演目、人形の形などジャワのワヤン・クリに非常によく似ている。ワヤン・クリ・プルワはジョーホールのジャワ系住民の間で演じられてきたものであり、ワヤン・クリ・ムラユはクランタンのスルタンがジャワにダラン (dalang/人形遣い) を送って学ばせ、持ちかえらせたと言われている。しかしこの2つのワヤン・クリは現在演じられることはほとんどない。

ワヤン・クリ・ゲデッはタイ南部のナン・タロン(nan thalong)の影響を強く受けていると言われ、縁取りだけを残して中をくり抜いた人形の形態などもナン・タロンに似ている。演じ手は現在スリ・アスン(Sri ASUN)というグループだけが知られているが、スリ・アスンは非常に精力的に活動しており、UMNO の選挙キャンペーンや、クダ州やプルリス州の州政府が行なうイベントなどでよく上演を行なっている。元々はラーマヤナのタイ版であるラーマキエン (Ramakien) を上演していたと言われているが、現在ではそのストーリーが演じられることはほとんどなく、主に道化のキャラクターを使って社会問題や政策などを取り上げて演じることが多いようだ。

ワヤン・クリ・シラム (ワヤン・クリ・クランタンとも呼ばれる)は、マレーシアで最も多く上演され、最もポピュラーなワヤン・クリである。マレーシアでワヤン・クリという場合、ワヤン・クリ・シラムを指すことが多い。以下ワヤン・クリ・シラムについて少し詳しく紹介したい。

ワヤン・クリ・シラム

ワヤン・クリ・シラムの歴史についてははっきりしたことはわかっていない。タイから入ってきたという説と、ジャワから伝わったという説があるが、記録や碑文などは見つかっていない。クランタンのダランの間では、Erok と呼ばれるダランを「祖先」とし、現代のダランに至る系譜が伝わっており、この伝承に従うと、ワヤン・クリ・シラムはタイから伝わり (Erok はタイ系の名前だと考えられている)、クランタンにおいて約 200 年の歴史を持つことになる。

しかしワヤン・クリ・シラムの中に見られる言葉などが、バリやジャワのワヤン・クリに似ていることから、現在考えられているよりもっと古い時代にジャワから伝来した可能性を指摘する専門家もいる。人形はナン・タロンやジャワのどちらとも異なる独自の形をしている。

ワヤン・クリ・シラムの演目の中心となるのは、ダランの間でヒカヤツ・マハラジャ・ワナ (Hikayat Maharaja Wana) と呼ばれる物語である。ラーマヤナがローカライズしたものと言われており、ヴァールミーキ (Valmiki) が編纂したラーマヤナと、登場人物の名前など類似した点が多いが、異なる部分もかなり見られる。非常に長い物語であるため、エピソードを取り出して演じられることが多い。またチュリタ・ポコツ (cerita pokok) と呼ばれる「本筋」以外に、スリ・ラマ (Sri Rama) やシティ・デウィ (Siti Dewi) などの登場人物が出てくるものの全く別のストーリーが展開されるチュリタ・ランティン (cerita ranting) と呼ばれる物語が数多くあり、村で演じられる時には、こちらの方が好まれることが多いという。

ラーマヤナには全く登場しないが、ワヤン・クリ・シラムにおいて重要な役割を果たすのがパ・ドゴル (Pak Dogol) とワ・ロン (Wak Long) という二人の道化である。パ・ドゴルもワ・ロンも真っ黒で、腹や尻など身体の一部が大きい不恰好な身体をしている。またスリ・ラマなどが非常に美しい衣装を身につけているのとは対照的に、上半身裸で、腰には汚い布を巻きつけた格好をしている。しかし、パ・ドゴルは天上界において最高位のデワであるサン・ヤン・トゥンガル (Sang Yang Tunggal) の生まれ変わりであり、ワ・ロンは地上に降りてきたパ・ドゴルが自らの身体についた汚れから作りだした者である。2人は

スリ・ラマに仕えている。どちらかが主人公となるチュリタ・ランティンもあり、人気が高いという。この2人の登場人物、特にパ・ドゴルは非常に大きな力を持っていると考えられている。

ワヤン・クリ・シアムのグループはダラン1人と6人～8人の音楽奏者からなる。ダランは全ての人形を一人で操るだけでなく、それぞれの登場人物にあわせて声音を変え、ナレーションを含め全ての物語を語る。音楽の奏者に対して指示を出すのもダランである。使用される楽器はスルナイ (serunai) (笛)、グンダン (gendang) (筒の両側に皮を張った太鼓)、グドウンバツ (gedumbak) (筒の片側に皮を張った太鼓)、グドゥツ (geduk) (筒の片側に皮を張った太鼓、ばちで叩く)、ゴン (gong) (どら)、チャナン (canang) (つぼ型で真ん中に突起のある真鍮製の楽器、布を巻いた棒で叩いて使用する)、クシ (kesi) (小さいシンバル) である。スルナイ以外の楽器はそれぞれイブ (ibu)、アナツ (anak) の2つがあり、大きさが異なる。

村で上演が行なわれる場合は、空き地にパンゴン(panggung)と呼ばれる上演小屋が立てられる。ジャワでは今でも祝い事などがあった場合に、家の主がダランとグループを招いて上演を行なうのが一般的なようだが、クランタンの場合は興行主が上演グループに対し一定の金額を支払って、商業的な上演を行なうことが多い。空き地を柵で囲い、観客は入口で入場料を払う (2004年8月の段階では2リングだった)。

ワヤン・クリ・シアムの衰退と州政府による実質的な上演禁止政策

ワヤン・クリ・シアムは1960年代頃までクランタンにおいて非常に人気のある娯楽であったが、70年代に入ると次第に衰退し始めた。60年代末にクランタン州で調査を行なった Amin Sweeney は、当時クランタン州だけでも300人ほどのダランがおり、稲の収穫が終わってから雨季に入るまでの「ワヤンの季節」には、人気のあるダランは木曜日とラマダン月を除く毎日上演を行なっていたと書いている。また1977年にクランタン州で調査を行なった Barbara Wright も当時ほぼ毎晚上演を観ていたという。しかし、ダランの数は年々減り続け1982年文化青年スポーツ省が行なった調査ではクランタン州全体で37人、1988年は25人、1999年は11人となっている。2004年7月にクランタン州のツーリスト・インフォメーション・センター (TIC) で見せてもらったリストによると、2004年にコタ・バル市の文化センター(Gelanggang Seni)で上演を行なっているグループは10グループであったが、そのうち2グループはすでに活動していなかったり、あるダランが別の名前で登録していたりしたため、実際に活動を行なっていたのは8グループであった。TIC に登録していないダランもいるが、全てを含めても20名はいないと考えられる (民

博の研究会において Eddin Khoo 氏も同様の見解を示していた。)

なぜワヤン・クリを演じる人はそれほど減ってしまったのだろうか。ワヤン・クリの衰退には映画やテレビなど新しい娯楽との競合や住民のイスラームに対する意識の高まりなどが理由として挙げられている。また衰退に拍車をかけたのが州政府による実質的な上演の禁止であった。

PAS は 1990 年の総選挙で勝利し、クランタン州政府の政権の座につくと、様々な「イスラーム化」政策を発表したが、伝統芸能についても、1991 年始め州内における全ての伝統芸能の上演について見直しを行なうと発表した。それに伴い州内の市及び郡参事会 (Majilis Perbandaran/Daerah) は、ワヤン・クリなどの上演に対するライセンスの発行を一時停止した (NST91/9/24)。1991 年 10 月には州内における伝統芸能の上演に対するガイドラインを発表し、マ・ヨン (Mak Yong)、ムノラ (Menora) は公の場における上演を禁止、ワヤン・クリとディーケー・バラッ (Dikir Barat) は上演が認められたものの、条件がつけられた。すなわち、ワヤン・クリについては、ダランがイスラームの教えに反するような儀式を行なわなければ、上演が認められることとされた (NST91/10/9)。ワヤン・クリを上演するためにパンゴンをとったとき、ブカ・パンゴン (Buka Panggung) という儀式が行なわれ、上演中の安全を祈願する呪文 (mantra) が誦まれたり、供え物が捧げられたりすることがあるが、それがイスラームに反するとされたのである。しかしワヤン・クリの上演に対して、ライセンスはその後も発行されることはほとんどなかったらしい (NST92/2/26)。

1992 年 10 月には、イスラーム及びマレーの慣習に関する委員会 (MAIK/Majilis Agama Islam dan Adat Istiadat Melayu Kelantan) がファトワを発表した。このファトワの中では、マ・ヨン、ムノラはイスラームに反するとされたが (NST93/12/29)、ワヤン・クリを特定した決定はなされなかった。しかしワヤン・クリの禁止は継続された。州首席大臣 Nik Aziz は、ファトワに関する新聞記事が報道されると、ワヤン・クリは幻想 (khayalan) の性質を持ったものであり、ファトワの有無に関わらずハラム (haram) であることは明らかである、と述べている (BH93/12/30)。96 年には、MAIK による新しいガイドラインが発表されたが、やはりワヤン・クリを特定した決定は何も行なわれなかった (HM96/3/7、NST96/3/7、8)。

1998 年には、36 年に制定された州の文化娯楽条例 (Enakmen Kebudayaan dan Hiburan 1936) に代わり、新たに娯楽及び娯楽場の管理に関する条例 (Enakmen Kawalan Hibutan dan Tempat-tempat Hiburan 1998) が制定され、ライセンスの条件に違反した主催者に対し最高 2 万リングギ、または 5 年の禁固を課すことが盛り込まれた。 (BH03/5/4)。

禁止措置が取られた当初は、ライセンスを取得しない上演も行なわれており、問題にな

っていたようである(BH93/12/18、NST 94/11/2)。しかし新しい娯楽条例により主催者に対する罰則が厳しくなったことは、無許可の上演を難しくするものであった。

その後もクランタン州におけるワヤン・クリの上演は基本的にほとんど認められていない。唯一コタ・バルの文化センターにおいて、3月から10月までの毎週水曜日、TICの主催による上演が行なわれているのみである。

ワヤン・クリを巡る新しい動き

2003年3月26日クランタン州において、「新しい」ワヤン・クリのプレビューが、州首席大臣 Nik Aziz のために行なわれた。そのワヤン・クリは DBP (Dewan Bahasa dan Pustaka) のイニシアティブによって作られ、ワヤン・クリ・デワンと呼ばれている。ワヤン・クリ・デワンはクランタン州出身で、文化芸術観光省の文化局長を務めたこともある A. Aziz Deraman 局長 (当時) の発案により、DBP の東部地域事務所 (Wilayah Timur) と 1 人のダランとの協力によって進められた。ダランが一人で人形を操り、物語を語っていくという上演方法は同じであり、演奏される音楽も同じものだが、登場人物や物語は全く新しいものである。スリ・ラマ、シティ・デウィなどは登場せず、登場人物は村や町に住む人々である。新しく作られた人形は全て普通の人間の姿かたちをしている。ポホン・ブリンギン (扇のような形をしたもの、ワヤン・クリの上演の最初と最後には必ず使われる) はデワン・バハサのロゴ・マークを模して作られた。上演される物語は社会問題を扱ったもので、プレビューの際には「迷ってしまった人生 (Hidup sesat di dalam perjalanan)」というタイトルで、貧しい家庭に生まれ育った少女が、生活のストレスから不良の仲間入りをしドラッグに手を出してしまうが、次第に自分の過ちに気づき人生をやり直すという物語が上演された。Nik Aziz はプレビューの後、ワヤン・クリ・デワンに承認を与え、その推薦に基づいて州のムフティとウラマーの承認を得た後、行政参事会においても承認が与えられた (NST03/5/28)。5 月には文化センターにおいて「新しい」ワヤン・クリのセミナーが開催され、ダランや関係者のためにワヤン・クリ・デワンの実演と、「新しい」ワヤン・クリの上演が許可されるためのガイドラインの説明が行なわれた。

ワヤン・クリ・デワン以外にも「新しい」ワヤン・クリを作る試みがマラヤ大学文化センターの Ghulam-Sarwar Yousof 教授と別のダランとの協力によって進められている。ワヤン・クリ・スマンガツ・バル (Wayang Kulit Semangat Baru) と名づけられたこのワヤン・クリでも、人形は全て新しく作られ、村人など普通の人間の形をしている。演目は日本軍政下のクランタンにおける悲恋の物語であり、オラン・アスリや日本兵も登場する。音楽もこれまでのものを基礎としながら、キーボードなど新しい楽器を入れる試みが行な

われている。

ワヤン・クリ・デワンは DBP が主催するイベントなどで上演が行なわれているという。ワヤン・クリ・スマンガッ・パルは 2004 年 7 月マラヤ大学で開催された国際ワヤン・クリ・セミナーにおいて初めて上演が行なわれたが、それ以降上演は行なわれていないようだ。クランタン州政府は、ダランに対しこうした「新しい」ワヤン・クリを上演するよう呼びかけていたが、他のダランからは積極的に受け止める動きは出ていない。

また 2004 年の総選挙で PAS が議席を減らしてから、ワヤン・クリの上演に対する許可がおりやすくなっているという。特にワヤン・クリ・デワンのダランや一部のダランは、2004 年に入ってから旧に上演回数が多くなったという（演目はヒカヤッ・マハラジャ・ワナなど従来のもの）。しかし現在いるダランのほとんどは弟子がいない状況であり、ワヤン・クリが今後どうなっていくのかは、依然不透明のままである。

